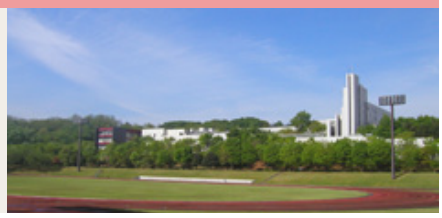
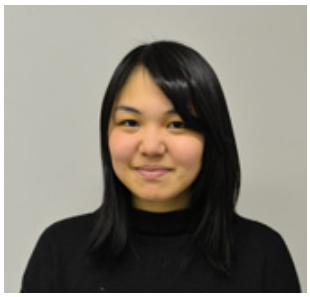
TEI 鼎談 DAN
学問と職業のカンケイから、大学進学を考える本

早稲田大学 スポーツ科学部

スポーツ科学部では広い視野をもって学習し、課題に積極的に取り組む意欲に満ちた学生を迎え入れたいと考えています。幅広いスポーツ科学の分野を真摯に探求できる能力を培い、スポーツ科学の発展に貢献できる人材を育成します。





■大学生
永野真依子さん

■先生
吉永武史准教授

■卒業生
工藤慎平さん

CONTENTS

●プロフィール　●大学生活について　●就職活動、仕事について
●5年後に向けて　●高校生へのアドバイス

●プロフィール

早稲田大学スポーツ科学部の特色について教えてください。

■先生

スポーツ科学部は、2003 年に設立された早稲田大学の中でも新しい学部です。人間科学部のスポーツ科学科から独立し、同じ所沢キャンパスや東伏見キャンパスで授業を受けることができるようになっています。数多くある大学の中でも、スポーツ科学で一つの学部を作っているところは少なく、その中でも当学部はかなり初期にスポーツ科学を専門的に学べる場所として設立されました。
名前の通り、スポーツ科学に関する知識や教養を身につけるのが学部の目的となります。とはいえ「スポーツ科学」という名称は、高校生にはピンとこないかもしれないですね。当学部には 7 つのコー

スがあります。
スポーツでの自然科学領域の知識を深め、身体運動の意義を探る「スポーツ医科学コース」。健康づくりを通じて豊かな社会を実現できる人材の育成を目指す「健康スポーツコース」。競技者だけでなく、あらゆる年齢層の健康作りをサポートする知識と技術を学ぶ「トレーナーコース」。スポーツスキルを向上させるための技術的・理論的背景を学ぶ「スポーツコーチングコース」。教員を含め、多彩な場面でのスポーツ指導者を養成する「スポーツ教育コース」。多彩なスポーツビジネスの場で活躍する人材の育成を目指す「スポーツビジネスコース」。現代社会におけるスポーツのあり方を学ぶ「スポーツ文化コース」の７つです。
大半のコースには「スポーツ」とついていますが、卒業生全員がスポーツに関連する職業に就いているわけではありません。一般企業に就職したり、海外へ留学したり、保健体育の教員になったり、研究者になったりと、非常に多様です。私たちが最も大切にしているのは、スポーツ科学についての学びを通して、社会に出てから役立つ教養やコミュニケーションスキルを身につけること。そして、様々な問題を解決する能力を身につけることです。学生たちは自分の興味関心にあった講義を受講するとともに、２年次に７つの中から専門とするコースを選び、卒業までに専門的な知識と技術を身につけます。私は「スポーツ教育コース」で教えていますが、中学校や高等学校の保健体育の教員免許の取得が可能であるため、コースに所属する多くの学生たちが免許を取得し、教員になることをを目指しています。

■卒業生
私も先生のゼミで学び、現在は高校で保健体育の教師をしています。でも、もともとのコースは「スポーツ医科学コース」なんです。

■大学生
私もトレーナーについて勉強をしています。しかし、将来は教員免許を取得し、故郷の母校で教職に就きたいという希望もあり、先生のゼミで体育科教育を勉強しています。

■先生
このように、自分の将来像が見えてくれば、それに合わせて授業やゼミを選択することもできます。とはいえ、自分のコースの勉強自体も大変なので、他コースにまで挑戦しようと思うとかなり大変です。彼は「それでもゼミで勉強して、教員になりたい」と論文を書いて提出し、熱意を見せてくれました。スポーツ教育コースには約 60 人の学生がいます。学部全体の２割弱ですね。そのうち約半数が、将来教員採用試験を受ける予定です。

先生の研究内容について教えてください。

■先生
小学校や中学校などの体育授業に関する研究を行っています。なかでも球技を専門にしていて、誰もが楽しみながら技能を伸ばし、そして将来にわたってスポーツを楽しめる礎となる体育の授業はどうやったら実現できるだろうか、ということを研究しています。小学校から高校までの児童や生徒にアンケートを実施すると、学年が上がるほど体育の授業に対する好感度が下がっていくという結果が出

ています。スポーツは生涯を通じて取り組むことができれば、いきいきと健康な生活をおくる一助となります。そのため、学校での体育授業の存在意義は大きいのです。でも例えば、未経験の生徒に対して「ソフトボールを学ぼう」ということでボールとバットを渡すだけでは、そのおもしろさは伝わりません。なにより、難易度が高すぎます。ソフトボールの楽しさは、ヒットが打てたときの気持ちよさや、ボールをキャッチできたときのうれしさ、そしてチームで得点を挙げたときの達成感があげられますが、それらを味わう前に「つまらない」と感じてしまいます。しかし、それが現在の体育授業の現実でもあるのです。
体育の授業を好きになってもらうためには、「誰もができる」ことが大切。それは単純に全員参加が可能な低難易度の授業を行うことではありません。運動やスポーツのエッセンスをくみ取り、簡単に楽しめながら、それでいて魅力が感じられるような授業にしなければならないのです。口で言うのは簡単ですが、ではそれはどういう授業なのか？　その答えが私自身の研究の成果になるともいえますね。そのために、競技のエッセンスを保ちつつもルールや条件を再構築して新たな教材を開発したり、新しい用具を導入してその効果を検証したりということもしています。

■卒業生
私は先生のゼミで学んだそのやり方を実際に授業で試したり、さらにアレンジしたりということをしていますね。生徒たちが「楽しい」と感じた瞬間って、表情が変わるんです。それがやりがいでもありますね。

お二人がスポーツ科学部に入学した理由を教えてください。

■大学生

少し話しましたが、私は教師になって母校で教えたいと思っています。ですが、教員以外の職業にも興味があって、教育関係の学部は選択肢になかったんです。それで国立大学を受験し、合格していました。そこまで決まっていながら「いろんなことを学びたいな」とたくさんの大学からシラバスを取り寄せ見ているときに、早稲田大学のスポーツ科学部のことを知りました。スポーツ栄養学などにも興味を持っていたこともあり、また多くの著名な教授がいる早稲田大学なら、「大学に入ってから興味が別の方に移っても、きっとこの大学なら学べる方法があるはず」と思い、受験を決めました。ほんと私、好奇心と興味は旺盛なんです（笑）

■卒業生
私も少し似たところがあるかもしれないですね。私にとって早稲田大学は２つめの大学なんです。高校時代は、野球一色でした。それもあって部活を引退したときは「大学に行かないといけないのかな」という気持ちで…。進学校だったこともあり、受験しないという選択肢はなく、当時やりたいこともなかった私は「とりあえず家の近くで、いろんなことが学べそうな学部に入っておこう」と、一番近い大学に入学したんです。
大学に入っても、講義に出るより母校の野球部のコーチをしている時間の方が長かったかもしれませんね。教えることは、とても楽しかったです。「教師になるのもいいな」と思っていました。ただそ

の時は、教える技術も知識もありませんから「がんばっていればうまくなる。速く走れる」という教え方。いま思うとひどい話ですね（苦笑）　でも、いくら走っても一向に足の速くならない選手がいたんです。どうしてだろうと思っていたら、たまたま学校を訪れていた先輩がその選手を見て「ヘモグロビンが足りないんじゃないか」といったんです。「？？？」という感じでした。でも、病院で調べてみると、先輩の言うとおり。そのせいでその選手は速く走れなかったんです。その先輩は、大学でスポーツ医科学を学んでいたんです。「自分はいままで井の中の蛙だった。これは専門的に勉強しないと勝てない」と痛感しました。それで、大学２年の時にその大学を辞めて、早稲田大学のスポーツ科学部に入学を決めたんです。

■先生
そういうところが、ちょっと私にも似ているんですよね。

先生がスポーツ教育を志された理由はなにですか？

■先生
私は大学時代、アメフトの選手でした。大学でアメフトをするために九州から上京してきました。私もアメフトが強ければ、大学はどこでもよかったですね。ただ、法学部や経済学部だとそのジャンルの学問しか学べない。それで、社会の様々な事象と関連づけた学びができる社会学系の大学を受けました。結果的に入学したのは、上智大学でした。ですから、学生時代は経済も、法律も、カトリック系の大学なので宗教についても学びましたね。就職は、一度アメフトの社会人チームに決まりました。クォーターバックでした。ですが、卒業間近の試合でケガをしてしまったんです。網膜剥離でした。そこで選手生命が断たれてしまったわけです。就職も白紙です。
そのときに、大学で親しくさせてもらっていた神父さんが「スポーツが好きなんだったら、今度はその楽しさを人に伝える仕事に就いたらどうだろう」とアドバイスをしてくれたのです。そこからスポーツ教育について学べる大学院を探し、保健体育の教員免許も取ろうと勉強しました。それがきっかけですね。
ただ、教師にはなりませんでした。当初は教師になることを考えていたのですが、学校現場に入ってしまうと忙しくて研究は続けられないだろうと思ったんです。そして、外から見ることで見えてくることもあるはずだとも考えました。教育の現場を離れたところから見て、そこに必要なものを考え、還元する。そういう立場になりたいと思ったのです。

●大学生活について

スポーツ科学部の学生生活について教えてください。

■卒業生
優秀なスポーツ選手も多く在籍しています。日本代表やオリンピック選手に選ばれるような選手がい

るんです。私もそういう選手たちが競技に励んでいるのをみると、どうしても体がうずいて、在学中はソフトボール部に所属していました。

■先生
インカレ優勝こそ逃したものの、国体の東京代表になったりと優秀な成績を残しているよね。

■卒業生
負けてしまったのはやはり悔しかったですね。また挑戦したいという気持ちもあります。

■大学生
私はラグビー部のトレーナーをしています。専門的な知識や技術を学びながら、実際に選手たちのサポートができるのは、とてもいい経験だと実感しています。ただ、早稲田のラグビー部は名門なので、練習がびっしり詰まっています。大学生活は授業とトレーナー一色という感じですね（笑） でも、1 日だけ友人の代わりにアルバイトをした日に、たまたま先生にお会いしたんですよね。あれはすごい偶然でした。

■先生
「ラグビー部はあんなに厳しいのに、アルバイトする余裕があるなんてすごいな！」と思ったんですが、違いましたね。でもびっくりしました。学生たちは勉強だけでなく、実際にはスポーツ活動にも取り組んでいるというのが実情ですね。所沢キャンパスとは別の場所にグラウンドがある部活に所属している学生たちは、移動時間が惜しいのでその近くに住んでいるようです。

■大学生
私がまさにそうですね。東伏見にラグビー部の練習場があるのですが、朝は 8 時から夜は 21 時過ぎまでそのグランドにいます。移動時間を短くするために、私はグラウンドの近くに住んでいます。

■先生
というように非常にスポーツ活動が盛んなのですが、授業は何よりも優先されるんです。「文武両道」が早稲田のモットーですから。たとえスポーツがメインで入学した学生でも、しっかりと単位を取らないと卒業することはできません。授業の時間になれば、部活の練習中でも中抜けして授業に行きます。伝統になっていますね。

先生のゼミではどんなことを学びますか？

■先生
スタートはコミュニケーションスキルを身につけることに主眼を置いています。いきなり課題図書を輪読するといったやり方ではなく、まず全員が近況について報告します。前回のゼミから、何があったのか、それについてどう考えたのかを自分の言葉で表現していきます。そこで多数に対して話す技

術を身につけていきます。その後は、トピックを取り上げて話し合います。体育の授業に限らず、体罰やいじめなど、教育に紐付けたトピックです。何度も論議を重ねる中で、少しずつ教育学に関する知識を身につけ、その専門知識を活かしながら話せるようになることを目指します。
3年生の後期には学生の進路が見えてきますので、それに合わせた勉強に変わってきます。私のゼミは教員を目指す学生が多いので、カリキュラムの作成や教授法について学びます。その一方で、卒業研究の内容を決めていき、資料を集めて、論文の作成に取り組むことになります。テーマを決めたら、それに基づく問題を抽出し、それを解決するために自分ならどうするかについて、レジメを作りプレゼンを行うという学習もあります。その際にも、ゼミ生同士でディスカッションを行い、コミュニケーション能力の向上を図っています。
卒業研究のテーマの多くは、教育とかスポーツ教育に関するものです。その中でも、彼が取り組んだ卒業研究は「教育は生きる力を身につけさせることが必要。そのために体育の授業ではどのように人を育てるか。そのために教師はどうかかわるべきか」といった内容で、これまで指導した中でもトップレベルの力作だったと思っていますよ。

■卒業生
ありがとうございます。照れちゃいますね（笑）

●就職活動、仕事について

高校で体育の先生をしてらっしゃると言うことですが、詳しくお話しいただけますか？

■卒業生

東京都内の工業高校で保健体育の教師をしています。ほとんどの生徒は、高校を卒業したら社会に出て行くことになります。ということは、高校でスポーツが嫌いになってしまったら、その生徒は生涯スポーツをする機会がない、という可能性もあるのです。そこで私は、「生涯スポーツにつながる体育の授業」を目指しています。体育の授業を楽しかった記憶として残してもらい、いつか「あのとき楽しかったあのスポーツ、またやってみないか」という感じで皆が集まるきっかけになればいいなと思っています。
また、保健の授業も受け持っています。喫煙や飲酒が体に与える影響などについても、ちゃんと教えることができる最後の機会になります。ただ「悪いからダメ」といった教え方ではなくて、因果関係を細かく説明し、科学的な根拠を示して伝えるようにしています。そうすることで、彼らが親の立場になったときに、また正しい知識を伝えることができるはずですから。そうすることが保健体育の授業の責任だと考えていますし、その責務を果たせることがやりがいだと思っています。

将来は母校で体育の先生になることを目指しているということでしたね。

■大学生
はい。高校生活がとても楽しかったこともあり、母校で恩返しができればと思っています。教育実習も間近に迫っていますが、母校で教えられるのが楽しみなんです。
ただ、現在いらっしゃる先生が定年で退職をされないと保健体育科の教員のポストが空かないのが現実です。また、大学生活は部活一色だったこともあるので、一度社会に出るのもいいかなと感じています。社会を知って、その経験を活かして教えることができたらと。

■先生
工藤君も同じように、社会に出るつもりで就職活動をしていたよね。大手損害保険会社の最終面接までいってましたよね。

■卒業生
そのことを話したら、先生が「教師になりたいなら、すぐになりなさい」とおっしゃったんですよ。それで就活は終了して、教師一本に絞りました。

■先生
何人かの学生には「社会を経験してから教員になった方がいい」とアドバイスをすることもあります。それはまだ自分がどんな教師になりたいか、どんな人を育てたいかというビジョンが明確に描けていないからです。社会に出ることで、いろんな人を見て、一緒に働くことで、「こういう人を育てるにはどうしたらいいか」という視点を持てますから。ただ、工藤君の場合はやりたいことが明確に決まっていた。社会に出て皆が学び、経験するようなステップを、すでに大学生で終わらせていたからね。ならば、いち早く教育現場に入った方がいい、と思ったんです。

● 5 年後に向けて

みなさんの5年後の目標について教えていただけますか？

■卒業生
教育現場を変えたい、という大きな夢があります。そのためには教育委員会でしかるべき地位に就かなければなりません。現在の高校での教員としての実績は、その際に大きく影響してくると思います。だからまずは、しっかりと生徒を育てて、送り出したいですね。そして５年後には、体育教師の視点から、教育の改革に挑戦できていたらいいなと思います。
また東京オリンピック・パラリンピックの年でもあるので、スポーツへの関心は一段と高まるかと思います。その機会を上手く用しながら、生徒たちが生涯スポーツに親しめるよう、頑張っていければ

と思います。

■大学生
私は企業で働いているか、もしかすると母校で教師をしているか、というころですね。やりたいことは決まっているので、それに向けて頑張れていればいいなと思います。

■先生
私は変わらずスポーツ科学部で研究を続け、日本の学校体育に貢献していたいですね。社会が変わると、求められる人材も変わります。それに合わせて、人材を育成するための教育も変わらなければなりません。ここ数年、体育の授業は目覚ましく変化しています。5年後は学習指導要領が変わる年。新しい体育の授業が展開されますから、それに合わせた研究に取り組みたいですね。

●高校生へのアドバイス

最後に高校生へ、メッセージをお願いします。

■大学生
私の母校は進学校でした。でも、学びも遊びも全力という校風で、受験勉強も競争じゃなく、助け合いながらやるという雰囲気。それもあって、私は1年生から全力で部活に打ち込み、引退まで部活一色でした。校内行事も一生懸命やってましたね。そのことについてはまったく後悔していません。しっかりと切り替えをして勉強に臨むようにして、今を楽しむこと。それが大切だと思います。

■卒業生

私がいま高校生に戻っても、高校野球に打ち込むと思いますね。教える立場からいまの高校生を見ていると、できないことや壁にぶつかったときに、あきらめて次へ行くのが早いと感じることがあります。なにかやりきったことがあれば、結果はどうであっても、それは思い出になり、経験になり、強さになると思います。いろんなことに挑戦するのもいい。その中でやりきる経験をして、強さを身につけて欲しいですね。あとはまわりに流されて大学を選ぶ、というのはよくないかな。やりたいことを見つけて大学に入るというのも大切だと、自分を振り返ると思いますね。

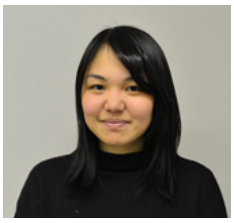
■先生
部活や学校行事に全力で取り組んで、遊んで、恋もして、あれこれ忙しいのがいいかもしれませんね。私も高校時代はいろんなことに取り組んでいました。楽しかったし、とても充実していたなと思いますね。だから高校生に戻りたいか、と聞かれると「戻らなくていいな」と思います（笑）。その時にやったことが、今に繋がっていますし、今の研究にも生きがいと社会的な使命を感じています。そうなる

よう、いろいろなことを一生懸命になって経験しておくのもいいと思いますよ。

●インタビューに答えてくれた方々

■先生
吉永武史准教授

■卒業生
工藤慎平さん



■大学生
永野真依子さん